

増傳妙寺の藤、小日向清水谷、むかしは名におふ藤也、今は老木となりて、英もみぢかくさして見所あらざれども、名木のむかし残りて温ぬる人多し。

増戻り藤、淺草熊谷稻荷社の傍に有、享保始のころ、境内辨天山の水石を疊の時、此藤を池の邊へはこび植るに、ほどなく枯たり、時に熊谷社の堂司見性坊夢みらく、我が藤をいかにしてか他へ植るのいはれなし、すみやかに元の地へかへすべしといふ事、兩度におよぶ、よつてその枯たるを以前の所へかへし植るに、幾ほどなく活で、枝葉さが青葉を見せたり、此藤今に存す。○中略

四時遊觀

藤 龜戸天神宮、樓門の前御手洗の池の上左右に棚あり、紫白のはなぶき、池水に影を去づめて、底さへ匂ふけしき也。○中略

藤 佃島住吉社、神前に方六十餘丈、棚枝葉つらなり、一向にそらをとちて、木の下闇の陰、茶店多く酒肴を貯ふ、花は紫白根は二もとあり、攝州の住吉も藤の名所也。○中略

藤 上野山王社、鳥居常のとりぬと異也、さの前に棚有、むたり二十間に及ぶ、紫白英をたれてな、めならず。○中略

藤 根岸の里寶鏡山有、圓光寺と云曹洞の禪林也。

堂のうしろに辨天の宮あり、その池邊にをひて三十餘間の棚、紫白の色をあらそふ。○中略

〔佐渡志五物産〕藤○中略 稚葉ハ饑荒ノトキ、賤民食ニ交ヘテ糧トスルニ味美大ツトイフ、根ヲトリ水ニ浸シ、賤民ノ衣服ニ製ス、風俗ノ部ニイダストコロノ、十畝帷子ノ一種ニ供ス、加茂郡川崎村ノイダストコロヲ上品トス、

〔花月草紙五〕藤の花はちかうみればうつくしけれど、餘りにちかづくれば、かほりはまたよからず、はなやかにさくか、とみれば、末まではひらき得ず、ことにおのれひとりさかりをみすること